

文、椛いちめ

注意

- ・ 流血、身体欠損の描写あり

取材の帰り、鴉天狗、射命丸文は楓の木を見上げている者を見つけてその隣に降り立った

「自分と同じ名の葉が散るのはやはり寂しいですか？」

その者の目が余りにも哀愁に満ちていたので思わず問いかけた

「まあ寂しくないと言えば嘘になりますが・・・私はただ来年にまた葉を付けるのを楽しみに待つだけです」

白狼天狗、犬走椛はそう答え小さく笑った。やはり楓には彼女なりの思い入れがあるのだろうか

あれほど鮮やかな朱色を誇示していたモミジの葉はもう枝には無い

秋の豊穡を司る姉妹が憂鬱さを感じ始めた、冬の入り口

妖怪の山も紅葉が終わり、色素を失い枯れ落ちた葉が山道林道問わず平等に敷き詰められていた

射命丸文と犬走椛が初めて言葉を交わしたのは、この山に神が神社ごと越してそれにより麓の巫女が山へ侵入してきた際である
鴉天狗の中でも上位に位置する文と下っ端の哨戒天狗の椛。身分に多少の違いはあるものの二人の関係は非常に良かった
椛の素直で真っ直ぐなところが文は好きだった。生真面目で融通が利かない面もあるが彼女のそんな所も気に入っていた
文の周囲には、隙あらば相手を出し抜こうと常日頃から画策する輩が多い。そんな知り合いばかりの中で裏表の無い椛の存在は
ちょっとした心のオアシスだった

話してよし、からかってよし、可愛がってよしの三拍子が揃っていた

「しかし最近物騒になったものです」

「そうですね」

枯れ葉をざくりざくりと踏みしめながら二人は歩を進める

軽装の文に対して、椛は腰と背にそれぞれ重量感のある剣と盾を下げているが、それを感じさせない軽やかな歩きだった

「一体犯人は何者なのでしょう？」

顎に手を当てて考える文に対して椛は申し訳無さそうに俯いた

「私たちも哨戒の人数を増やしてはいるのですが、面目ありません」

「ああ、いえ、別にそんなつもりで言ったんじゃない・・・」

山の治安を人一倍気にかけている椛に対して失言だったと後悔する

僅かだが気まずい空気が流れる

夕焼けが沈むのも大分早くなり二人の影は徐々に夜の闇に吞まれようとしていた

今月になってから天狗が何者かに襲われるという事件が4件も発生した

一月も満たない間にこれだけの件数起こるのは明らかに異常だった

襲われた者は皆大事には至っていないが、事態を重く見た天狗上層部は最近になり調査隊を立ち上げて捜査を開始した

しかし精鋭揃いの隊にも関わらず、今日までこれといった手がかりは見つかっていない

そのため多くの天狗たちが不安な夜を過ごしていた

「天狗を狙うということは、我々天狗に恨みがあるのでしょうか？」

「わかりません、椛の考え以外にも様々な可能性がありますし」

今、巷では様々な憶測が飛び交っている

『山の外の妖怪の犯行？』

『妖怪の山を奪還するために裏で鬼が暗躍しており、その下準備ではないか？』

『河童の新兵器？』

『過去に追放された天狗が復讐に戻ってきた？』

『人間の企て？』

『結界を抜け出てやってきた正体不明のナニか？』

噂が一人歩きして尾ひれ背ひれを付けていたが、どれもありえない話では無かった

「椛たち哨戒の部隊も何か進展はありませんか？」

メモ帳と万年筆を取り出す文

「あの、もしかして今回の事件を新聞の記事に？」

「当然です。あわよくばこの事件の真相を我が文々、新聞が解明して今年こそ年間売り上げの一位という栄誉をこの手に！」

高揚し高らかに宣言する文と「やっぱり」という苦い顔をする椛

「社会の出来事ありのままに報道してこそ新聞！！このような凶悪事件を私のジャーナリスト精神が見過ごせるはずないで
しょう！？」

「・・・」

この状態の文に何を言っても無駄だと知っている椛は深いため息を吐いた

「これは今日見回っていた仲間の話なのですが」

「んもう はじめからそうしてくれればいいのに」

にんまりと笑いメモ帳をめくる

「あくまで情報をまとめて報道するに留めてくださいよ？ 独自の捜査は絶対にしないで下さいね」

「重々承知しましたから早く続きを、椛のお仲間がなんと？」

「・・・はあ」

二度目に吐いたため息は空中に白く残ってすぐに消えた

椛の話した内容を全て記入し終える

「しかし、どれもこれも犯人を特定する手がかりには弱いですね」

内容の率直な感想を述べる

いろいろな部隊が連携して捜査しているため、ほとんどの内容は他の所から仕入れた話と重複していた

「しかしこれだけ探しても何もでないということは、もしかして天狗内部に犯人が」

「文様、あまりそのようなことは」

桜は顔を伏せた。犬耳も一緒に垂れる

「あ、すみません。また失言でした」

文のように犯人が身内に潜んでいると考えるものは少なくない、口には出さないが皆それは密かに思っていたことだった

桜はそれに心を痛める者の一人である

「暗がりですら完全な不意打ちだったとはいえ、犯人を取り逃がすとは、この射命丸文一生の不覚です」

「何を言ってるんですか、怪我が無かったことをまず祝うべきです」

実は文も被害者の一人だった

『事件の取材に行った帰り、突然殺傷能力の高いを撃ち込まれた。幸い弾は文には当たらずに後方の木々を傷つけた飛んできた方角

を見た時そこにはもう何も無かった』

と仲間の天狗に説明した

文の家に着く

「では警備があるので私はこれで、いいですね？ 間違っても夜道を出歩いての調査など…」

「わかってます。桜も夜道には注意してください、私よりずっと弱いのですから」

「うぐ」

指摘されて小さく唸る桜。そんな桜の首筋を冬の風が撫でた

「今夜はさらに冷えようです、どうか暖かい格好をしてお休みください、それと火の元、戸締りを忘れず、ちょっとでも周囲に不審な

点を感じたら使いの鴉を飛ばして最寄の…」

「わかった！ わかりましたから！！ そんな娘の一人暮らしを心配する母親みたいなこと言わないで下さい」

これではどちらが年上か分らない

「それではお休みなさい」

「はい、お休みなさいませ」

見えなくなるまで桜を見送った後、文は自宅の戸をあけた

自室に戻り今日あった出来事をまとめようと机についた時、今更になってふと思った

(はて？ なぜ桜はわざわざ私の家までついて来たのでしょうか？)

桜の自宅は出会った楓の木の所から文の家とは正反対の位置にある

彼女が自分を心配して善意でここまでついて来てくれたのだと、今さらになって理解した

(それなのに「弱い」だなんて酷いことを言ってしまうでしたね・・・)

彼女の気遣いを酌み取れない自分を不甲斐無く思う

(これが本当の『送り狼』・・・ふっ)

自分があまりにも下らないことを考えていると思いつつも、小さく吹いてしまった

(まあ何もされませんでした)

個体寿命が長い故、繁殖という概念が希薄な天狗には同性愛者が多い、鞍馬天狗がそのいい例である

文にはその嗜みは無いが、桜にだけはなんとなく惹かれるものを感じていた

(桜はどうなのでしょう・・・？)

よく世間話をするとはあるが、そこまで踏み込んだ内容は話したことがなかった

(また今度、一緒に呑みたいものです)

厳戒態勢の今、山の警備を務める白狼天狗に休みは無かった

部屋が火鉢でだいぶ温まり指が滑らかに動くのを確認したあと、この事件の流れを簡単に別紙にまとめてみた

一件目 被害者 白狼天狗 山の神が開いた宴会の帰り倒木による負傷

・・・この時は故意か事故か半信半疑だった

二件目 被害者 鼻高天狗 夜道を散歩中突然頭部に痛みを感じる。その後すぐ頭部に軽い打撲があるのを発見、凶器不明、鈍器？ 岩？

・・・この時に一部の天狗が事件性を示唆する

三件目 被害者 鴉天狗(射命丸文) 取材の帰りに弾幕を射ち込まれる。無傷。完全な不意打ちだったため犯人を見逃す

・・・上層部も事件と断定して捜査を開始する

四件目 被害者 山伏天狗 印刷業の夜勤、野外で一服中に突然腕が燃え上がる。幸い軽い火傷。妖術の可能性有？

・・・事件解決を目的とした部隊を設立

事件はいずれも夜に起こっていた

(桜はああ言いましたが、やはりどれもこれも天狗の仕業で説明がつきそうですね)

一件目の倒木は言うまでもなく、二件目の打撲は天狗礫、四件目は天狗火の枝技だと仮定したら、文にはそうとしか考えられなかった

どれもこれも多くの天狗が使える簡素な術である

「さて」

メモ帳を開き自分が聞き込みをした人物と、その者が話した内容に軽く目を通すとメモ帳を閉じて机の隅っこに置く

次に引き出しから原稿用紙を取り出してペンを黙々と走らせる。その間、メモ帳を開き内容を確認することは“一切”なかった

文にとって『～～に聞き込みをした』という事実があるだけで十分だった

眠気を忘れて何かに取り憑かれたように書き続けた

次の日

文は事件のネタ集めで飛び回っていると、滝の上、そこから少し離れた場所にあった大きな岩の上に腰掛けている椀を見つけた
気配を消して気付かれないように慎重に背後に回る

椀は体を微動だにせず、愛らしい獣の形をした耳だけが忙しく動いていた

「おはようございます椀」

「おはようございます文様」

椀は特に驚くことなく振り向く

「その目の下、どうやら昨日は徹夜したようですね」

「そういう文様こそ」

二人の目の下には隈ができていた

椀は夜警で一晩中、文は新聞の原稿執筆で一晩中起きていた

「警備ご苦労様です。どうです今夜？ 人里にでも呑みに行きませんか？」

「ええ、夕刻からは非番なので構いません」

「そうですね、日が沈む頃にでも昨日の楓の場所で落ち合うというのは」

「ではその時間に・・・」

文の背後の遙か向こうに椀の眼は向けられていた

「どうしました椀？」

「いえ、あそこに大勢集まっているのが」

千里先を見通すことのできる椀の目が離れた場所の人だかりを捉えていた

「あちらの方で何かあったみたいですよ」

その言葉を聞き文は自分の商売道具をさっと取り出す

「よし！ 行きましょう！」

「あまり現場を荒らさないでくださいよ・・・」

呆れ顔の椀を無視して、文はその方角へ飛んでいった。それに椀も渋々ついて行く

「これで5件目ですね」

事件は昨晚に起きたらしく現場にはすでに別の捜査隊が現場検証を進めていた。そのため椀たち白狼天狗が出る幕は無い

鑑識の中に今回河童の姿も混じっていた

二人は少し離れたところで鑑識の動きを眺める

先ほど二人が現場に近づくと、その場にいた者達から何故か睨まれた

文はなんとなくだが自分たちが近づいたことで場の空気が変わったような気がした

「文様、相当嫌われてますね」

「しかたありません。マスコミの宿命というものです。まあいいです、椀、ここからでもあなたなら現場の様子くらい見えるでしょう？」

「ええまあ...血の飛び散り方や、周囲が荒れてないところから恐らく凶器は刃物の類か金属製の鈍器かと」

椀が現場の様子と自分なりの考察を文に伝えた

「そうですか、しかし不可解ですね」

「不可解？」

文はメモ帳を開きページをめくる

「毎回毎回凶器がバラバラなんですよ」

「そういえば」

一件目から今起きた五件目まで襲われ方が皆違っていた

「犯人は複数いるということでしょうか？」

「もしくはそう見せかけているのか」

文と椀に近づくものが一人

「どうもお二人さん」

現れたのは知り合いの河童だった

「にとり殿、なぜこちらに？」

「今回被害にあったのがさ・・・その、身内なんだよ」

「え？」

驚き目を丸くする椀。五件目の被害者は天狗ではなく河童だった

「そんな、まさか、だって...」

信じられないという顔をする文。椀とはリアクションが若干異なっていた

「幸い数針縫う程度で済んだけど」

文も椀も胸を撫で下ろした

「それは何よりです」

「うん、それはそうなんだけどさ...」

「「？」」

にとりは帽子のつばを掴み顔の前まで下げて、表情を隠した

言いつらそうに口を二、三度もごもごと動かしてから、ようやく言葉を発した

「怪我した奴が言ったんだ・・・」

「何をですか？」

「いやそれがさ...」

「もったいぶらずに教えてくださいよ」

言いつらそんな顔をしてにとりはあたりを見回した

犯人は、白狼天狗かもしれないって

「はい？」

にとりの言う意味がわからず口が開いたまま静止する椀

「だから被害者が『犯人の容姿が白狼天狗に似てた』って、暗がりだから見間違いかもしれないけど」

文がここに来たときに感じた違和感はそれだった。自分ではなく椀を見て場の雰囲気が変わったのだ
「そんなはず無いじゃないですか！！山の警備を請け負う私たちが自ら山の治安を侵すなど！！」
にとりの肩をそれぞれの手で掴み揺さぶる
「待って！待って！！あくまでも『かもしれない』って話でまだそうと決まったわけじゃ」
数えきれないほどの回数大将棋を打つ仲であるが、ここまで興奮した椀を見るのは初めてだった
文が周囲を見回すと他の天狗や河童の視線が椀に集中していた
自身は取材で邪険されることはよくあるが、彼女に向けられている目はそんな生易しいものではない
「とりあえずここから離れましょう、いいですね椀」
「はい・・・・・・・・にとり殿、怒鳴ったりしてすみませんでした」
深々と頭を下げる
「椀が謝ることなんてないよ、不確定な情報を軽々しく口にした私が悪いんだから」
今度大将棋の続きをしようと約束を交わして、椀はにとりと別れた

「嘘、ですよ」
「椀？」
一休みできそうな場所に着いて早々椀は地面に膝を突きそう呟いた
瞳には生気が宿らず、瞳孔が開き顔はただ無表情だった
「白狼天狗が河童を襲うなど...」
この件で椀を含めた白狼天狗が全て容疑者扱いされるであろうことは容易に予測できた
「まだそうと決まったわけではないじゃ」
信じたわけではないが、その河童の証言は椀の心を大きく揺さぶった
かけるべき気の利いた言葉が見つからない
「すみません、少し一人にさせてください」
「わかりました」
文は椀の言う通りにする他なかった
椀に背を向ける
「いろいろと気にかけて頂きありがとうございます」
「.....」
その言葉が文の心を締め付けた

自室に戻った文は頭を抱えた
「なぜこんなことに...」
自分は厄神に恨みを買うようなことでもしたのだろうかと思いたくなる
事件は自分の小さな掌から零れ落ちて、急坂を転がり始めていた

事の発端は一件目の事件が起きた夜
山の神が開いた宴会に文も参加していた
酒に強い自分は普段酔うことは無いが、その時はほろ酔い気味だった
宴会が終わり家への道を進んでいると草むららがさがさと揺れた
イノシシでもいるのだろうかと思ひ、おどかすつもりで団扇で扇ぎ細い木々を複数倒した
次に聞こえたのが叫び声だった。その時ようやく自分が間違いを犯したのだと思った
見たところ相手は軽症らしく、ほっとしたのも束の間
大きな恐怖心が文を襲った。酔っ払って他人を怪我させたとあっては自分の今後の信用に関わる
「“あの”射命丸文の新聞」と呼ばれ、ただでさえ信用されていない新聞の記事が更に信用を失う
自分の新聞が誰からも見向きされないのが嫌だった。それだけは絶対に避けたかった
酔いも手伝い、文の思考はその場から逃げ出すことを選択した
もしかしたら事故で処理されるかもしれないという淡い期待もあった
しかし二件目の事件で事態が一変した
二件目の事件は大方、度の過ぎた悪戯が自分のように誤認して相手を傷つけてしまったのだろうと文は予測したが
「立て続けに天狗が夜道で負傷するなど天文学的確立だ」と提唱する者が出てきた
その提唱をある者は信じて、ある者は鼻で笑った
文も一緒に鼻で笑っておくべきだった。しかし彼女はこの状況を逆に利用してやろうと思ってしまった
この出来事なら新聞の小話程度にはなるだろうと考えついた
そして自身も被害者を装うことで関連性の無い出来事を強引に一本の糸で結びつけてしまった
だが文の意に反して第四、第五件目の事件が起きてしまった
恐らく居もしない通り魔を警戒するあまり、暗闇で出会った相手に過剰反応してしまったのだろう
犯人を恐れて気配を消して行動する者同士が突然出会えば何が起きるかわからない
負の偶然が何度も重なって起きた本来ならまず有り得ない出来事だった
加害者の誰かが名乗り出ればこの一連の事件は解決するのだろうが、文同様に皆居もしない犯人に自分の罪を擦り付ける腹積もり
なのだろう
天狗は一部の例外を除き、皆、狡猾だった

文と別れてしばらく考え込んでから椀は一旦自宅へと帰っていた
あれこれ考えながら横になり、夕方になるころには気持ちはほぼ平常心に戻っていた
気分はまだ若干の憂き気味だがこういふときは呑んで気を晴らすのが一番だと知っている

簡単な身支度を済ませた後、今日文と約束した楓の木の木の下へと向かった

椛が家を出た頃、文はまだ机に向かっていた
「もういい加減に事態を收拾させないと」
四件目が起きた時は、自分が名探偵よろしく事件の全容を記した記事を発行して一躍注目を浴びてやろうと考えていた
だが今日の出来事でそんな余裕は無くなった
是が非でも今夜中に記事を書き上げて椛たち白狼天狗の無実を知らせたかった
それにこのまま放っておいたら椛たちの負担が増えるだけでなく事件に便乗して、普段うっぴんの溜まっている相手に闇討ちする
者も出てくるかもしれない
否、もしかしたら四、五件目のどちらかは既にそうなのかもしれない
昨日書き途中だった原稿を取り出す
「なんとしても今夜中に...」
それが今の自分に出来る唯一のことだと信じ一心不乱に手を動かした

(文様遅いなあ...)
10分、15分遅れることはあっても30分も掛かるのは初めてだった
(あんな風に別れたから、約束そのモノが無くなっているのでしょうか?)
不安になってきたため、一旦文の家に伺おうか考えた
(でも途中で入れ違いになって戻ってきた時に『椛！遅いですよ！！罰として今日はあなたのおごりです！！』なんて言われたらちょっと癪だな)
その時、目の前を白いものがちらついた
「あ、降ってきた...」
この年度になってから初めての雪だった
袖についた雪を凝視すると結晶が見えた
(うん綺麗だ)
自然が作り出す芸術を見て頬が緩んだ
しばらくそれを眺めることにした
文の家にはもう少し待ってから向かおうと考えた

「よし、綺麗に撮れてます」
薄暗く酢酸の臭いのする部屋に閉じこもり、文は新聞の一面を飾る写真を現像していた
原稿はほとんど書きあがった。誤字脱字をチェックすれば終わる
後は写真を選びそれが完全に乾けば印刷所に持っていきける
「おや？」
玄関で物音がしたような気がした
「誰でしょうね」
手を洗い、あかぎれにならないようにタオルで丁寧に水気を拭き取ってから向かう
戸を開けて初めて雪が降っていることに気付いた
日は完全に落ちていたが、雪の反射で少しだけ外は明るかった
先ほどまで深々と降っていた雪は、何時の間にか強風で吹雪きに変っていた
(道理で寒いと、風も大分強いですしそれで戸が揺れたのでしょうか？明日の朝は結構積もってそうですね)
さっさと戸を閉めて現像室に戻った
吹雪のせいで視界が悪く、去っていく椛の後姿を見つけることが出来なかった

(家にもいないということは何かあったのでしょうか?)
椛は待ち合わせの場所に戻ってきた
鼻まですっぽりとマフラーを巻いてその場に座り込み、文の行きそうな場所を考える
約束を忘れているのか？理由があって遅れているのか？
あれこれ考えて、自分は結局待つことしか出来ないと結論付ける

しかしあれから30分ほど待っても文が来る気配は無かった
足元には雪が積もっていた
首を振って頭に積もった雪を落とす
(帰ろう、これ以上ここにいたら雪だるまになってしまう)
文は来ないと思い立ち去ろうと考えたその時、自分以外の誰かが近くで雪を踏みしめる音を聞いた
寒いのを我慢して耳をピンと立てる。音は確かにした
その方に歩くとやはり誰かがいた
吹雪いてよく分らないが、気配からして鴉天狗だろうと思った
声の届く距離まで近づくと、相手もこちらを見た
(文様じゃない・・・?)
それは文ではなく他の鴉天狗だった。しかし様子がおかしかった。椛を見るなり突然、扇を取り出した
(まさかコイツが!?)

嫌な予感がして咄嗟に剣と盾を手取る

その動作がいけなかった

轟音と共に桜は全身に痛みを感じた、気付いたら視界は真っ赤に染まり空を仰いでいた
寒さで指がかじかみ、自分の手元に剣と盾が握られているのかさえわからない
視界の端で慌てて逃げて行く鴉天狗の姿が見えた
痛みと混乱でぐちゃぐちゃになる思考をなんとか纏め上げる
(あの方はひどく怯えていた)
事件の犯人像と結びつけるにはどうも遠い、最初の動作も戦うというよりも自衛に近かった
(ああ、そうか……)
今、白狼天狗には強い疑いがかかっていたことを思い出す
(私が白狼天狗だから……私があの方を疑ったように、あの方も私を通り魔だと思ったんだ)
暗闇で面識が無く疑心暗鬼を抱える者同士がかち合えばこうなることは明白だった
桜は一連の騒ぎのカラクリに気付いた
「始めから犯人なんて居なかったんだ」
喜ぶべきか悲しむべきかわからないまま、桜の目蓋は下がった

文が桜を見つけたのは日付の変わる直前だった
新聞を完成させたのでそれを持って印刷所に行く途中
桜の体は雪に覆われており、雪原が血で赤くなっていなければ目に付かなかった
掻き出した桜の体はまるでおろし金で撫でられたように削られ、唇は寒さで変色し、額もぱっくりと割れていた
楓の木も無残に倒れていたことから、風を操る同じ鴉天狗の犯行だとわかった

桜は天狗が開業している医者に担ぎこまれた

あやさま、わたしわかりました、いちれんのじけんに“はんんにん”はいないんです

抱きかえられた桜が震える声で文にそう告げた
「そんなのとっくにわかっています……私がそうなるようにしてしまっただけですから」
気合を入れて書いた新聞の原稿と写真は途中でどこかに飛んでいってしまった、誰かが拾っても雪でインクが溶けてもう読めない
だろう
文は治療を受けている部屋の椅子に手を組んで座りひたすら待った
その待つ姿は祈る形に似ていた
桜が一命を取り留めたことと知らせを聞いて、文は全身の力が抜けるのを感じてそのまま椅子の上で眠りについた

気がつくとも朝になっていた、雪が止み窓からの強い照り返しで目を覚ます
二日徹夜した疲れが溜まっていたことを思い出す
桜が居る部屋を教わり早足で向かう
「失礼します」
ノックもせず部屋に入る
病人用の着物を纏い、頭と両腕に包帯、左目に眼帯をした状態で桜が布団から体を半分出して外を眺めていた
慌てて歩み寄る
「桜、その目……」
桜にとって目を失うのは大きな痛手である
「大丈夫です。二、三日休めば眼帯は取れます。視力も落ちてないそうです」
「もう！ 本当に心配かけないで下さい！！」
「わふっ」
惜しげもなく喜び、桜の頭を胸に抱え込む
「い、痛いです！ 痛いです文様っ！！」
「当然です。これは罰です、桜が私を心配させるなんて千年はやいですから」
もがく頭を完全にロックする
「しかし無事で本当に良かったです」
「……あはは」
突然桜の声のトーンが下がったのを感じた
「どうしました？」
「それが、その……無事というわけでは……」
「？」
抱擁から解放して視線を下に落とす
「ッ！！？」
桜の両の手に本来あるべき指が消えていた
残ったのは右手の小指と薬指、左手の中指と薬指だった、凍傷による壊死で完全に皮膚が死滅したため戻る気配はないという
「困りました。もうにとり殿と将棋が指せそうにありません……」
彼女なりに精一杯おどけだっただろうが、文にはそれが逆に痛ましかった
「……」
口を開いたが文は言葉が出てこなかった
「私の、せい……？」
喉の奥から搾り出してようやく出た声それがそれだった
「いいえ、私の不手際です」

椛はこれまでにない剣幕で文を怒鳴る
病室にいる時からそうだったが、文には椛が気丈に振舞っているのを見るのが辛かった
このまま頑張り続けたら壊れてしまうのが文にはわかる
「もうやめてください」
だから椛の両手を握った
「離してください！！こうでもしないと私は、私はっ！！」
俯き、震えだす。握った手に涙が滴る。どちらの涙なのか説明するまでもない
「無理しないで下さい、誰もあなたを要らないだなんて思ってませんから」
諭すように出来るだけ優しく言った
「それでも、私は、自分を...」
使命に厚い椛にとって今の自分は何よりも許せなかった
文は好きな人をここまで追い詰めてしまった自分を呪う
少女の嗚咽が一つ、二人しかいない庭に木霊した

「落ち着きましたか？」
「はい」
二人は縁側に腰掛けていた
椛の目はまだ赤く腫れていた
二人の間にはお茶と菓子が置かれていた。どちらも椛が用意したものである
「器用ですね」
「よしてください」
茶を啜り、文は切り出した
「私もう新聞書くのやめようと思うんです」
自分なりのケジメのつもりだった
「どうせ誰も読んでませんし」
言って自嘲気味に笑った
「そんな、それは駄目ですよ！！」
「？」
椛がこれに反対するのを意外に感じた
「ちょっと待ってください」
突然立ち上がり、靴を脱いで部屋の奥に消えて、両手首を器用に使い紙の束を持って戻ってきた
「私、ずっと読んでたんですよ。山の神社の一件で知り合うずっとずっと前から」
それは文々、新聞の束だった
「あまり山から出ない私に毎回記事の内容は新鮮で、文章も読み手にわかりやすいように配慮されてて、子供に文字を教えるときに参考に使わせてもらったりとかして、その、ええっと...」
聞いていると涙が溢れてきた。こんな間近に読者がいた
「椛」
「はい」
袖で目元を拭う
「結婚しましょう」
「はいいいい！！？」
素っ頓狂な声を上げる椛
「冗談ですから真に受けしないでください、だからそんなに驚かないで」
「だってあんな真顔で言うんですもん、誰だって驚きますよ」
「(まあ半分冗談ですが)・・・もしよろしければ哨戒をやめて私と新聞を作りませんか？」
椛に向けて手を差し出した
「なんかプロポーズしてるみたいで照れますね」
「あははははは」
その笑顔が普段どおりで文は安心した
「すみませんが...」
躊躇いがちに椛は首を振った
「私は白狼天狗、山を守ることが私の生きる道であり、たった一つの誇りです」
毅然とした態度でそう言い放った
「そうか、そうですね」
「折角の申し出なのですが」
「構いません、それでこそあなたです」
もうこの子は大丈夫だと文はわかった
「そんな椛に私からプレゼントです、といっても今すぐには渡せませんが」
「なんですか？」
「明日か明後日にでもわかります」
文は立ち上がると椛に背を向ける
「あの、文様」
「はい」
「新聞、やめませんよね？」
「ええ、こんな熱心な購読者がいるんです、やめるわけじゃないじゃないですか」
そう答え、一度も振り返ることなく文は飛び立った
その後姿に椛は小さな不安を感じた

「どうやらここで間違いないようですね」

ある家の前で文は止まる

(仲間の証言や、アリバイを組み合わせればここ意外に考えられません)

そこは椛を襲った鴉天狗の家だった

(落とし前はキチッとつけて頂かないと・・・)

永琳と交わした約束『殺しは禁止』を破ることにした

相手にも情状酌量の余地はある。順当にいけば自分が椛に指を提供するのが正当ではある

始めは自殺なんでもして椛に指を返そうと思った。しかし今日の出来事で自分は椛に必要とされているとわかった

ひどいエゴだとは思いますが自分も椛との日常に戻りたかった

だからズルを承知で相手に泣いてもらうことにした

(天狗が天狗に神隠しされるなんて笑えない冗談ですね)

これは記事にはならない、事件にもならない

一匹の天狗が行方不明になった。ただそれだけ。きっと組織を離れて気ままに暮らすことにでもしたのだろう

(凶器は何がいいでしょうか。新鮮さは保たないと...)

この夜、妖怪の山から一匹の天狗が消えた

fin

-
- 文が死ぬのかと思った -- 名無しさん (2009-06-11 15:30:56)
 - 消えた天狗は果たしてどちらか -- 名無しさん (2009-06-11 18:33:37)
 - その犯人の天狗が消えたと思っていたけど...
なるほど、そういう考えもあったのか。 -- 名無しさん (2009-06-13 07:43:14)
 - 文が指の奪取に成功したとしても椛がそれを受け入れるかどうか.....
受け入れたら受け入れたで周りから「その指どうした」って疑われそうだし
結局事実関係を厳しく追及されて文には破滅しか待ってないような気がする -- 名無しさん (2009-06-13 19:05:18)
 - 文と椛をもっと虐めたい -- 名無しさん (2009-06-14 16:35:40)
 - 結局文が返り討ちに -- 名無しさん (2009-06-16 05:29:15)
 - 文と結婚するのは俺さ！！

- そして俺は病気さ -- 名無しさん (2009-06-23 20:14:16)
- 他の天狗達も文と椛と同じような感じになっているなら永琳がぼろ儲け。
そして、山は誰もいなくなった。
なんて妄想をしてみる。 -- 名無しさん (2009-07-04 23:30:44)
- 文は大天狗に次の事件があればそいつの指くれ。とでも言えば良いんじゃないか？
そうすれば文も黒じゃなくなる。
.....脳内の文は黒だがな（下着的な意味で） -- 名無しさん (2010-03-20 20:17:11)
- 一応、事件の真相を知ったのは文と椛だけで、真相を書いた新聞も無くしたから他に知っているやつはいない。だから事件は解決していないので次の事件が起きて誰も不審には思わない。 -- 名無しさん (2010-03-20 22:30:58)
- ちゃんと物語として面白く、素晴らしい作品です。
剣士の指とか、アイデンティティーを失う系のは「良い」ですねやはり。 -- 名無しさん (2010-04-11 23:50:38)
- こういうのが読みたかった！！ -- 名無しさん (2011-01-14 02:11:23)
- これいいな -- 名無しさん (2011-05-22 19:49:54)
- 自分の取り柄が無くなるのは本当に辛い -- 名無しさん (2011-05-22 20:56:48)

名前:

コメント:

投稿